

世界の文学

29

ロマン・ロラン

魅せられたる魂 I 宮本正清訳

中央公論社

世界の文学 29

©1963

ロマン・ロラン

訳者 宮本正清

昭和38年6月12日初版発行

昭和44年3月20日30版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)振替東京34

目次

魅せられたる魂 I

新版への序

第一版への序

一 アンネットとシルヴィ

二 夏

三 母と子
(上)

解説

491

451

173

21

19

5

魅
せ
ら
れ
た
る
魂

I

新版への序

『コラ・ブルニョン』の、一九一四年五月付の「読者に告ぐ」のなかで、私は『ジャン・クリストフ』の「甲冑をつけた十年の窮屈さ」について語った。「この甲冑は、初めは私の寸法に合うように作ったものだが、とうとう狭すぎるようになったのであった。」それにたいして抵抗の必要が生じた。私はそれを、「ゴール風に自由で陽気な」この作を通じて行なった。この作はすでに着手されていた他の諸作に先んじてなされた。

それらの諸作の一つは『ジャン・クリストフ』のように少し悲劇的な雰囲気をもった小説であった（私は今日ではこの少しという緩和的な言葉を除くことができない、というのは二十年このかた、悲劇的なものが世界の上におそろしくのしかかってきたからである）。——その小説が『魅せられたる魂』であった。この魂は創造の闇の底で、うごめきはじめていた。

『ジャン・クリストフ』の最後の巻のはしがきは一九一二年十月の日付になっている。同じ年の同じ月に、けっ

して休息を知らなかった精神は次のように誌していた。

「善も悪も拡大しなければならぬ」

そして彼は新しい行動の分野を、男性と女性との現代の二世代の矛盾衝突の中に求めていた、この両世代はおのおの違った進化の段階に達していた……同一の時代の女と男の間には平行ということはない（おそろくかつてなかったのであろう）。女性の世代は、その時代の男性の世代に比して、つねに一時代の隔たりをもつて、進歩しているか、遅れているかである……今日の女性は彼女らの独立を獲得しつつある。男性は発酵させつつある……」

『魅せられたる魂』のおもな女主人公のアンネット・リヴィエールはこの女性の世代の前衛にぞくするが、この世代はフランスにおいて、偏見と、道づれたる男性の悪意に反抗して、独立の生活に向かって困難な道を切りひらかなければならなかった。勝利は、その後、みごとに得られた——古い雄どもの執拗な抵抗がまだ残っているラテン系の国々の政治の分野を除けば。しかし最初の突撃部隊にとっては、戦闘はつらかった——とりわけアンネットのように、貧しく孤独で、自由な母性の危険をあえて冒そうとした女性たちにとっては。そのかわり、闘う女性たちは、散在していて、そのめいめいが、他の人

人を知らず、自分ひとりに頼るはかなかったので、その試煉とおおしい孤独の生活は、同じ世代の男性の多くの人々よりも自由でおおしい性格を形成した……しかしこの勝利のために、その後につづく女性たちの前進がにぶつたとは言えない。なんとすれば試煉と衝突によってのみ種族は——雄にしても雌にしても——前進するからである……神のおかげで、私の娘であり私の伴侶であるアンネットにとっては試煉も障害もけつして事欠きはしなかった。最後の日まで『川』は海にむかって流れる……何も停滞してはいない！ 前進する生命……前進！

死のなかにいてすら、波は私たちをはこんでゆく……死のなかにいてすら、私たちは前方にいてであろう……」

*

しかしこの生命の『川』は一九一二年にすでにはらまれ、その源の水を飲んだのであるが、しかし前進を始めるまでに九年のあいだ待たなければならなかった。なんとすれば戦争の大洋とその血なまぐさい渦巻は喪と紛乱の連続となり、一九一四年から一九二〇年にわたる年月をみたしたからである。精神は闘いに燃え、その噴出が『リリュリ』や『クレランボー』となった。この時代は肉体と精神の危機によって終結をみ、一九一九年から一

九二〇年にわたって、病が襲来して、魂と生命を鑄直すにいたった。

一九二一年に、死んだ魂と生命は投げすてられた、「空の封筒のように……死のう、クリストフ、生まれ変わるために……」そしてそれと同時に、はからずも象徴的運命によって私はパリに別れを告げた。それまで私は住居をそこに残してあったが、いよいよフランスの外に定住することになった。

私の作品に関する、当時の手記は、知らずして、私の生活にもあてはめうるものだが、こう言っている。

「それらの出来事は機会や口実にすぎない。内面的必然性の手によって、徐々に張られていた発条をはずすのがせいぜいその役目である」

戦前の作品を生んだ旧い住居、旧い町、旧い国を出発することによってページはめくられた……「さらば、過去……」そして新しい一章がひらかれた。

一九二一年五月の末にパリを去った私は、六月の半ばころにすでに、ヴィルヌーヴで、こう書いていた。

「新しい小説『アンネットとシルヴィ』に着手。大きな楽しみ。知らなかった一人の人間が私の中に忍びこんでくる、そして彼の血と彼の思想と彼の運命とを私の中にしみこませる」

この仕事は無事に、一九二一年の六月十五日から十月十八日まで、一息に進められて、『アンネットとシルヴィ』は完了した。

前述の手記はこう誌している。

「一つの生の出来事の物語をいつも書くが、それはまちがいで、ほんとうの生は内部の生である」

また「アンネットとシルヴィの読者に告ぐ」という文は、「よるこびにも苦しみにも豊かな、真摯な、長い一つの生涯——矛盾をも免れない、あやまちも多い、また、真理に到達できないならば、私たちの窮極の真理である精神の調和に達しよう」とつねに努力する生涯の内心の物語」を予告している。

この内部生命は『ジャン・クリストフ』のそれとはちがっている。それはたんに一人の女性、違う世代の物語であるからというのではなく、秩序と制御をあたえる精神の知的創造による不断の発散をもって、情熱の奔溢を脱却することのできないこの女性は、激しい半意識の襲撃に身をまかせることがはるかに多かったからである。

彼女のまわりの人々は誰も、こうした情熱の黒雲の群

がりに気づかない。アンネット自身もひさしくそれに注意しない。彼女の生命の外観はムードンの森かげにまどろむ池のようである。しかし、物静かな、まじめな、合理的なこの女性が、自ら知らずして、眼に見えないエロス——「正」(Eas)と「邪」(Nets)の限界を知らないエロスを宿していることがこの物語の興味の中心である。

それは四、五の形態を次々にとる。——まず、父親にたいするひそかな愛は、ぼんやりした気持ではあるが、アンネットがみとめるよりもはるかに強く、父の死と、彼の秘密の女性関係を発見した後に、この気持が不意にあらわれる。ついでは、妹にたいする熱烈な愛情であるが、それは美貌のパリスの一時の出現のために試煉をうけ、二人の姉妹は競争者となり、つかのまは嫉妬の爆発をみるが、まず姉妹の一人、ついで二人が、姉妹のために愛する男を犠牲にする。——三番目には、情熱のいろいろう嵐が起こり、結婚の中や外部に調和を求めようとするが、それは不可能である。それは息子にたいする母の愛である。けっして息子はその愛の熱烈さをはかり知ることとはできない。なんとなれば、孤独な長い闘いによって魂の制御力を獲得したアンネットは、この内生命の焰を、一道の静かな光明としてしか外部に輝かせないからである。しかし彼女は今では知っている、そして自分の胸のうちにいづく情熱の燃えさかる世界——世界がど

うすることもできない——を彼女だけが知っている。

——その後は、戦争中に、祖国にたいする動物的本能のために踏みじられ、侮辱され、憎まれた人間にたいする激しい憐愍の爆發である。そして、その反動から、負傷した敵の俘虜に愛をささげるために、野蛮な群衆のために嘲罵をうける。——最後に、人生の大きな曲がり角をすぎてしまつてから、「無限」が吸引する、魂の底知れぬ深みがあらわれる。

私はここには、最初から定められていた大要を誌すにすぎないので、その順序も十年間の仕事の間には改訂を加え——その間に他の仕事になされ、その仕事によってこの作が豊かになつたのであつた。

しかしこの長い広々とした内部の「川」は、初めから終わりまで、すべての人々、もつとも親しい人々の眼をものがれて展開し、もつとも親しい人々もその流れの激しさや傾斜には気づかないのである。これは本質的性格であつて、これは変わることはなかつた。わずかに彼女の息子はそれを滲透によつて知るが、共通の血が彼らを結んでおり、また彼らは深い愛情を、おくれながらも、かちえたにもかかわらず、母親は、いちばん愛する彼にも、自分の地下的な存在の秘密をもらしはしない。

このように、彼女の生活は二つの平行面の上に進んでゆく。他の人々は上の面しか知らない。もう一つの面で

は、彼女は一人でいる、いつも。

ただ一人で、火の中に、神聖なヴェールに包まれている。なぜこの永久の焰があるのか、目標をもたないかに見え、対象を変え、しかもつねに同じであり、彼女の生命の糧であると同時に悩みであるこの焰は？ アンネットがその生涯の終わりにほとんどついてから、その回答が彼女にあたえられ、そのことを彼女に理解させ、受諾させるのである。

終わりにおいて、彼女が自分の「川」の流れの全体を見渡すときに、その焰と焰が焼きつくす糧との不均衡が彼女にはいっそう驚愕すべきものに思われる。愛が執着する対象のおのおのは幻である。それはまさしく「迷惑」である。——この作の内容をなし、この題になつていふ言葉の意味を、私はわざと、謎のままにしておいたのである。「魅せられたる魂」は、その生涯の進むにつれて、彼女の身をつつむ幻影の衣をぬぎ去るのである。一重の衣が落ちるたびに、彼女は裸になつたとおもう。ところが他の衣が前のに代わる。おのおのの巻が大きな「幻想」の仕切り部屋である。「魅せられたる女」は、熱をおびた手で、夢をふりはらうが、次から次へと、最後の夢まで——（それがはたして最後のものだらうか？）——夢に落ちこみ、そこで生きた人々と彼女をつなぐ最後の紐が臨終によつて断ちきられる。

しかしすべてが過ぎ去り、すべてが魔術であるとしても——本質的な力、幻想と夢の力、不斷に創造し更新する生命の躍進力——「偉大な魔術師」はのこるのである。それは彼女のなかにある。それは彼女の生命の源である。アンネットはジャン・クリストフと同様に、創造的な魂の大種族にぞくしているが、しかしたいへんちがった種類のものである。彼女は生命どもを創造するが、作品を書くことはまれである。「けっして彼女は書くために、書くことはない。彼女がそれをするのはまれな時である。息がつまり、いっさいの生きるよすがを失い、わが身を焼いて己が火を養わねばならないときである。それから彼女は、情熱が彼女からもぎとった荒い詩の叫び声を発する」彼女は娘で、姉で、恋人で、母親である。彼女は「宇宙の母」であり、病気の終わりのころ、生きている人々のすべての歎びや苦悩とともに味わいつつ、この悲痛なよろこびのささやきを発するにいたる。

「幼児、幼児の世界、おまえはわたしの中にいたほうがよくはなかったの？ どうして出てきたの？……」

*

しかし、この作の初めでは、生命のわきたぎる内心の淵を意識するところからは遠い。第一巻——「アンネットとシルヴィ」——は、父親の死まで、若いアンネット

が味わった、あたたかい、ぼんやりした、夢のない、たのしい仮睡からのめざめを誌すにすぎない。仮睡は死の夢魔によって突如として破られる。心は不条理な恋の幻影に、やっきになって飛びつく。そこで優柔不断な心、盲目的な感能の飛躍は、狂った小鳥のように飛びかい、またぶつかる。そして心は不条理に選ぶ。しかし大きな幻影はその目的たる「子供」に達する。

ここで「夏」によって真の作が、真実の生涯がはじまる。「アンネットとシルヴィ」は、その春の序曲にすぎなかった。多くのものは、『ジャン・クリストフ』の「曙」にたいしてなしたと同様に、序曲でとどまるであらう——この音楽のなかに、告知でなくして、生の忘却をもとめ、眼かくしをするように、それで身をくるむ人は。しかし、『ジャン・クリストフ』と同じように、『魅せられたる魂』の真の意味は、すべての眼かくしを次々にもぎとることにある。

美しい盲女アンネットが幻想——子供の幻影、愛人の幻影、二人の生活の幻影——の罫にかかると同時に、人が偶然と呼ぶ、世の理性よりも賢明な彼女の運命の手は、彼女の財産の破滅と彼女の幸福な生涯の廃墟を超えて、彼女に「新生」の敷居をまたがせる。

一九二一年八月の手記は言っている。

「アンネットの貧しさは、クリストフが外国にいるのと同じであって、彼女をして新しい眼で近代社会の虚偽を見ぬかせる。アンネットは真摯しんしだったにもかかわらず、自分がそれにぞくしている間は、それに気がつかなかった。

アンネットが自分のパンをもとめはじめた瞬間から真の発見時代が彼女にひらける。恋愛も発見ではなかった。母になったことさえも。彼女は発見の本能を身内にもついていたが、現実はその不完全に満たすにすぎない。ところが貧乏の陣営に移った日から、彼女は世の中を発見する。

まず、この生活の奇怪なむだ——今日の社会が不具にしたこの生活の九割までが……（とくに、女性の生活の……）

食い、眠り、生殖する、そうだ、それは、有用な一割だ。ところがその他はことごとく！……車輪は回る。しかし空回りである！……人間はほんとうに考えるように作られているだろうか？ あたかもそう思いこんでいるかのである。そうした態度をとるように、自己暗示をあたえる。きまった身ぶりをすると同じように、考えることを自己にしているのである。がしかし彼は考えはしない。彼は、日々の自分の仕事とか、自

分の満足とか、自分の倦怠けんたいなどという鎖につながれて、仮睡する犬である。……女性に関してはまた何をか言わんや？……」

アンネットは「夏」のなかで発見する、「文明の衣のかげに、その贅沢ぜいたく、その芸術、その渦巻、その騒音のかげにかくれた空虚を……『必然』が明らかにあらわれた声音、人間のひらめき、またこの『必然』にたいする明敏な自覚はなんとまねなことだろう！……お、この人類とはいかに脆弱ぜいじやくな建物だろう！ それは習慣だけでもついているのだ、それは崩壊するだろう、一撃のもとに……」

アンネットにとって、地震を告げる最初の啓示——この地震は、十五年のちに、大戦争と革命によって、ヨーロッパと世界を震撼しんかんさせた！

アツシジの「貧者」の神秘の婚約者である貧しさは、犠牲にされた群民への同胞愛の扉をひらくばかりではない。それは新しい道徳を照らすのである。それはもはや古い道徳ではない。狭苦しい、色のあせた、禁止やお説教で固めたような、また裁判所や教会の懺悔場ざんげばから生まれたような、仕切りをした社会の番犬のような道徳ではない。それは「勤労」の新しい道徳だ……「勤労」は權威をそなえた唯一の貴族の称号だ！ 創造的人間、すなわちほんとうに生きている唯一の人間の本質的な力と歓よろこ

びだ——永遠のもろもろの力に参加する唯一のもの。
彼は生ける人々の共同社会のために、謙虚なあるいは力づよい、生産的な行動のなかに身を投ずる。そしてそれのみが——行動すること、万人のために行動することが——「美德」である、男性的な意味において。その他のことはすべて「小さい徳」である。

それからは、けわしい、まっすぐなこの大道に向かったアンネットは、熱烈に一人の道づれをもとめる。「夏」のなかで彼女が会おう二人の恋人は、彼女の生涯の軸の両端——慈悲と真理——とを守る結婚の不可能なことを彼女に示す。弱い方（ジュリアン）は赤裸々な真理に堪えることはできない、彼はそれにヴェールをかける必要がある。強い方（フィリップ）には優しさがなく、敗れた人々を踏みこえて進む。アンネットは彼らのために、真理を犠牲にすることも、慈悲を犠牲にすることもできない。彼女はけわしい道にただ一人である。そのうえに、その時には、彼女はわが子から見すてられ、ほとんど憎まれていると思う——（なんととなれば彼女の情熱はいつも、あらゆる方向に誇張するからである。）彼女は精神的に死につつまゐる。

ところが彼女を救うのは、多くの場合と同じように、このたびも、驚くほど伸縮自在な彼女の性質と彼女の跳ね返る力である。彼女が力つきて倒れる瞬間に、絶望の

淵から激しい生命の突風が現われるので、魂はたちあがり、ふたたび生気を回復する。苦しみが詩となってほとばしり出る。その後では、魂は解放される。アンネットはぐっすりと眠りに落ちる。翌日、眼がさめると、苦しみは減びている。いっさいが、アンネットのまわりでは、同じである。しかもすべてが新しい。彼女は生まれかわったのである。

「慈悲。真理。私は何ひとつとして犠牲にしなかった。私はただ一人である。私は無暇である。私は生を抱きしめる、私はその価値を知っている、そして私がそのためにどんな代償をはらったかを私は知っている。生命ばんざい！ 私は神にいとむ！」

これは戦闘における均衡、完全でしかも脆い瞬間である。彼女が健康と、抑制力と、充溢を有する今では、この均衡は可能である。夏のまっ盛り……

「金髪のアネット、北方的ながつちりしたこの女は、小舟にのって海上をゆく北欧人たちの幻影をもっている。彼らは、舟の衝角が波濤を突き切るのを見る、濤が飛び散るのを見る、そしてよろこび、舟についてくる大鳥らと同じように自分たちも自由だとおもう……もっと速く！ もっとはげしく！ 濤にあたれ！……しかし秋分がくる。嵐を警戒しろ、片翼は折れた！」戦争がくる。この本が閉じられる時に、戦争は入って

きた。

「夏」の創作は一九二二年七月十一日から十一月五日までつづけられ、一九二三年の前半期に補足し、完成した。

*

この作をふたたびとりあげるまでに二年すぎた。しかし「私は神に挑戦する！」ということを一日たりとも中止することなく、この作はペンをおいた時と同じ行から同じ叫びをもって、ふたたび取り上げられた。巖の上にとまった鳥のように、精神は飛び出すときをねらっている。

一九二五年一月十日の手記は言っている。

「昨夜、突如として、自分が逃げ出すべき戸口をかいま見た……私は自分が戦争の方に追いつめられるのを見ていた。そして私は『クレランボー』の平和主義にのしかかる戦争のために粉砕されるのをがれようと欲していた。とつぜん……『神に挑戦する』アンネット、戦争の残忍性のために少しも心を乱されなかった彼女、この始原的な力は、一つの出来事——侮辱される俘虜たちの到着——と情熱の衝撃によって変わる。

彼女は自然の事実ということとを弁解として受動的に受けていた——ところが彼女自身には、彼女自身の自

然の法則、より高い自然の法則があった。彼女はそれを粗野な自然に対抗させる。俘虜たちを保護するために彼女が激越な態度で介入したために、摩擦が生じると同時に、それまで彼女を圧迫していた不安が消えるが、それは戦争の非人道性よりも、彼女がそれを認容していたことからきていた不安であった」

「なんとすれば、平和とは戦争のなきことならず、それは魂の力より生まるる美德なればなり」

(Pax enim non belli privatio,

Sed virtus est, quae ex animi fortitudine oritur.)

この力にたいして、よりつよい一つの力——弱さではなく、あきらめではない！

死のせとぎわにある重傷者ジェルマンとの同胞愛——恋よりもふかいこの友情はアンネットの夢をはっきりと行動の方向に向ける。仮睡していた彼女の生命の小舟は、それがのせている人々とともに、彼女の息子とともに、乗りだす。彼の運命は遠方に、急湍に向かっていることがすでにほのみえる。広大な知性をそなえたジェルマンの場合、ありとあらゆるものへの理解が、行動への嗜好を害していたが、死のまぎわに、自分の生涯の誤りをみとめる……

「彼が理解するのが悪いのではなかった。行動しないのが悪かった……すべてを理解し、かつ行動すること……」

そして彼はアンネットに言う。

「しっかりおやりなさい！ あなたの心情の本能は多くの賛否よりも確かです。あなたには息子があります。彼に言うてください、すべての重さを測り、すべてを愛するだけで満足しないようにと。選んでくれと！正当であるのは立派なことです。しかし真の正義は、秤の前にすわって、皿が動揺するのをながめてはいないのです。それは判定し、判決を実行します」

このジェルマンの遺言、この遺贈を、アンネットは自分の息子に伝達しなければならないが、それは彼女の手中では重い。なんとすれば、行動する「真の正義」は、そのの圧迫時代またはその世界的低下の時代においては、宿命的に犠牲にいたるからである。アンネットの責任がいっそう深くなるのは、この巻の終わりで、彼女が悲痛な躊躇のあとで、わが子の「父と母」になるからである。彼は選んだ。そして彼女は彼のために選ばねばならなかった。——終わりの真摯な談話で、二人は、内密の心底を語りかわし、戦争を行なったり、平和（嘘つき）の平和、新しい戦争を妊んだ（平和）を作ったりする社会にたいする軽蔑や、そんな平和や、そんな戦争を拒否す

ることを語りあう。——アンネットはマルクの思想に銘記された犠牲の覚悟をみて、恐怖におそわれる。そして彼女の愛は、彼女の信念にそむいてまでも、それをそらせた。ところがマルクは彼女や彼女の信念をまったく信じきっているので、決定権を彼女の手にゆだねる。そして彼女はそれを曲げることが不可能である。たとえ結末——たとえ休戦——が来てこの決心をやめるにしても、それが延期されたにすぎないこと、近い未来において、生贄はふたたび火刑台にかけられることはあまりにも明瞭である……「しばし、まて！」（Warte nur!……）最初のページで、アンネットは自分の中に宿っており、自分の避難所であり、普遍的な「幻影」の幻を彼女にあたえる「夢想」の大きな地下流のなかで、自分の「見る力」を麻痺させようとこころみる。しかし彼女は、自分がめざめれば「……もうすぐに、もうすぐに……」「悲しみの母」が自分を待っていることを知っている。

*

ふたたび制作は中断されて、本篇と「予告する者」の三巻との間には三カ年の間隔がおかれる。「母と子」は一九二五年十月二十四日から一九二六年五月二十日までにかかれ、「予告する者」の制作は一九二九年十一月十一日に始められ、一九三三年四月七日までつづけられる。

——しかしこの作は、情熱と熱のうちにたえず孵化しつ
つあった。

「運命」の前進を待っていたのは、そして、眠れぬ夜々、犠牲の決心をくりかえしくりかえしあらためていたのは、アンネットとマルクだけではなかった——それは作者だった。なんとすれば、一夜ならず、息子の死を、事前からすでに歎き悲しんだアンネットが言ったように」

「卑怯な人々以外にとっては、生命は危険たらざるをえない」、容赦のない時代においては、犠牲ということは疑う余地がなかったにしても——若い人々、きみたちにとっては——（老人たちについてはもはや語る価値はないが）——犠牲のいくつかの形式の中から選択するといふことがあったし、またつねにあるのである。いずれがもっとも美しいかということではなく（今はもはや、「行為はどうでもいい、身ぶりさえ立派であれば！」といった時代ではないので）あたらしい人類社会の「出産」を助けるために、いちばん有効な、つまり必要な形態はいずれであろう？

私はこの時代に、インドとソ連の社会運動の二つの主要な経験を検討していた。私はこの両者のいずれにも感謝していた。彼らを知った最初の日から、私はソ連とガンヂーを、彼らの敵にたいして擁護した。ところが、歴史的宿命は彼らをして互いに敵たらしめた。そして私は、

マルクと同じように、力のかぎりをつくして、両軍の絆となろうと欲し、またきたるべき幾世紀にわたって、世界の進行を粉碎しようとする『政治的反動』、『帝国主義的資本主義』とファシズムの巨大な力にたいする、自由な精神と無産者組織の二大革命の共同戦線を張りたいとのぞんだのであった。

ガンヂーのインドの無暴力不認容と組織暴力革命との相反する二つの原理の間に、外部に、調和を作り出す機会をうるためには、まずその調和を己の内部につくることから始めねばならなかった。彼らは、私の精神のなかで、「かの魂の決闘」を行なっていた。その重荷を私は若いマルクの肩にゆずり降ろしたのであった。そしてその重荷を降ろすとともに、「私たちの眼の前で、私たちの腕によって、人類が書き、そして演ずるイリアドの、内面の神々の大戦闘を必要とする時期」を私はみとめたのであった。マルク・リヴィエールの優しくてしかも激しい人格、「四頭の馬によって四肢を引張られ、四つ裂きにされたこの若い肉体」はヘラクレスの有名な言葉「もっとも美しい調和」を、「不協和音の黒い蜂蜜」を作りあげるための必死の努力を、権化しているのである。彼の生によってそれができないなら、彼の死によって、それを摘みとるであろう。短い期間の生活の中に結集した、ヨーロッパ精神の凄絶な進化を、急激な